

2020.9.13.ハイデガー・フォーラム第15回オンライン大会 特集「中世哲学」
「エックハルトにおける離脱の教説——意志からの自由という観点から——」レジュメ

早稲田大学名誉教授 田島照久

「講演」と「対話」から成るハイデガーの著書『放下』（辻村訳）では、われわれが物や技術的な事象へと関わる際にどう在るべきかということが、「思惟すること」に関わる問題として探られている。

物をわれわれの世界の内に入り来たらせる (lassen)、と同時に物を物としてそれら自身の上に置き放つ (lassen) という二重の lassen の働きが提唱されているが、ハイデガーはこうした在り方を「一つの古語」を用いて「物への関わりの内における Gelassenheit」と名づける。この Gelassenheit という在り方において初めてわれわれは諸々の事物や技術的な事象の内、沈着・平静 (Gelassenheit) を得るとされている。この物への関わりにおける沈着・平静 (Gelassenheit) は人間の本質である「思惟すること」によってもたらされるものであることをハイデガーは強調する。

物を物としてそれら自身の上に置き放つ (lassen) というわれわれの物への関わりをハイデガーは「密意」に対するわれわれ自身の「開け」(die Offenheit für das Geheimnis) と呼び、この開けにおいて成ずる思惟によってわれわれは「目の利く」(hellsichtig) 者となると言われる。それゆえに思惟は意志ではなく、この他ならぬ Gelassenheit をその本質にしているとされる。

Gelassenheit をめぐる以上のようなハイデガーの思惟を理解するためには、ハイデガー自身が Gelassenheit を「ひとつの古語」であると語っているように、その淵源たる Gelassenheit をめぐる思惟を確認しておかなくてはならないであろう。この語は中世ドイツのドミニカンであるマイスター・エックハルト (ca.1260-1328.1.28) やその精神的後継者であるヨハネス・タウラー (ca.1300-1361.6.16) が好んで用いたものである。

この Gelassenheit をめぐる思惟および、エックハルトにおいては更に神論への射程も有する「離脱 (Abgeschiedenheit) の教説」の背後には、豊かに富を蓄積した中世都市生活者であるキリスト教徒が抱える当時の深刻な問題があった。豊かな所有の中で、修道士の誓願の一つでもある「清貧」をどのように実現しうるか、という問題である。高度な所有状況のもと、所有を否定せず、同時にその所有に囚われない自由な在り方を実現することが中世的な課題であったといえる。イエスの時代とは異なる「貧しさ」の解釈が、「ルカ福音書」の「貧しい人々は幸いである」ではなく、「マタイ福音書」の「心の貧しい人々は幸いである」に基づいて説かれることになる。キリスト教がヨーロッパという異土に根付くためのいわば「キリスト教のヨーロッパ土着化プロセス」の典型例である。「心の貧しさ」である「清貧」は Gelassenheit として、離脱 (Abgeschiedenheit) としてエックハルトやタウラーによって徹底して説かれていった。

以下、エックハルトにおける Gelassenheit に関する言説を手がかりにして、さらに「捨てる」(lassen) ことの意味が「囚われなく在ること」(ledig) として更に展開されているエ

ックハルトの「離脱(Abgeschiedenheit)の教説」を見、この教説がエックハルト独自の「imago dei 論」と「恩恵論」(Gnadenlehre)に基づいていることを示してみたい。

なお、ハイデガー、エックハルト、タウラーに共通する Gelassenheit という語をどう日本語訳するかであるが、「放下」(ほうげ)という辻村訳は、禅宗の典籍に登場する語を用いており、一般には「放下著」(ほうげじゃく)という用語で知られているものである。「放下著」(ほうげじゃく)とは、「下に置け」というほどの意味で(「著」は命令の意を表す助詞)、捨て去ってしまえ、という意味はないとされている。因みに入矢義高監修、古賀英彦編著『禅語辞典』では、「放下」(ほうげ)とは、「単に〈置く〉、〈下(お)ろす〉ということ。放り投げることではない」、つまり捨て去る意味ではないということが明言されている。典型的用語例としても、『碧巖録』「第四則」の評唱に「〔徳山〕路上に一婆子の油滋を売るを見て、遂に疏鈔を放下して、しばらく点心を買って喫せんとす」(徳山は路上で婆さんが餅を売っているのを見て、〔担いでいた〕注釈書を下ろして、少しの間食べ物を買って食しようとした)、とあり「放下」とは禅門の用法では、「下に置く」という意味を出ない。lassen の持つ「捨て去る」「そのままにする」という意味はないということになる。「物を物としてそれら自身の上に置き放つ」というハイデガー的用法に即する限りでは、「放下」は適訳といえるであろうが、とくに「自らの意志を捨て去ること」という「古語」としてのタウラーの用法までを視野に入れるとなると困難が生じることとなる。共用しうる訳を探らなければならないであろう。今回の発表では近代語訳 Gelassenheit そのままを使うが、あえて邦訳すれば「放念」であろうか。